２０２２年５月８日（日）＜母の日＞
宣　教　「見つめ続け、思い続ける」
聖　書：ヨハネによる福音書２１章１節～１４節

　みなさん、おはようございます。
今日は母の日です。すべての人の母の上に神さまの祝福をお祈りいたします。
さて、今日の聖書個所には、復活されたイエスが七人の弟子に現れたことが記されています。
◆イエス、七人の弟子に現れる
　1:その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現
された。その次第はこうである。
その後と言うのは、エルサレムの町で 2 度にわたって復活されたイエスが、恐れて家に閉じこもっている弟子たちに現れた後にということです。
ヨハネによる福音書によれば弟子たちはその後、イエスが宣教を開始したガリヤラ地方に帰りました。ティベリアス湖というのは、イエスが漁をしていたペトロたちを弟子として「わたしについてきなさい。」と声をかけ招いた湖のことです。弟子になった 12 人の内多くの人が、漁師でした。
　マタイによる福音書によれば、十字架につけられる前、イエスは「復活した後、ガリラヤへ行く。」（マタイ 26 章 32 節）と言っておられました。
　彼らは故郷に帰ったのです。どのような気持ちだったでしょうか。故郷の人々に中には、弟子たちに厳しい目を向ける人たちもいたことでしょう。きっと弟子たちは失望して悲しみや気落ちした心を持っていたと思うのです。また二度復活されたイエスに会っているのでまた会えると言う希望もあったかもしれません。
　ヨハネによる福音書によれば、イエスは、ここガリラヤ湖畔で自身を現されました。これでイエスがご自身を現されたのは 3 度目となります。
今日の個所にはその次第が記されています。
　2:シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出
身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が
一緒にいた。　7 人の弟子たちが一緒にいたのです。
「その手に十字架の釘跡を見るまでは信じない。」と言ったトマスもそこにいました。
　弟子の筆頭格であった、ペトロは 3 節によると、
　3:シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わ
たしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り

込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。
ペトロの呼びかけに応じて他の者たちも漁に出かけました。何年ぶりでしょうか？　彼らが故郷から離れ、漁から離れて 3 年はたっていたと思われます。7 人はどんな気持ちだったのだろうか、と思います。他の 5 人、イエスを裏切ったユダはこの世にいませんでした。他の 4 人はどこに行ったのか。それぞれに故郷に戻ったのかもしれませんし、他の場所に行ったのかもしれません。

ペトロを含め 7 人の者たちは、ガリラヤ湖に漁に出かけます。それしかできなかったのです。新しい日常が始まったのです。しかし、その夜は何もとれなかったのです。これはその後のイエスの群れである、初代教会の宣教・伝道の働きの姿であるとも言われます。宣教、伝道がうまくいかない。厳しい社会の状況や迫害などで実際困難な時を迎えたのです。わたしたちも、3 年に亘るコロ何とか集まって時間を短縮した礼拝を捧げて来ました。しかし、弱くても小さくても、漁の働き、つまり宣教、伝道の働きをを止めずに続けることが肝心なのです。大切なのです。
　なぜなら、復活のイエスが共に居てくださるからです。
　この時、ガリラヤの湖で起こったことが、以下記されて行きます。

4:既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子た
　　ちは、それがイエスだとは分からなかった。
　「既に夜が明けたころ、」とは、完全には、明けきっておらず、まだ暗さは残っているが明るくなってきた頃です。「イエスが岸に立っておられた。」。何かこの言葉に凛とした響きを感じます。「イエスが岸に立っておられた。」これは過去形です。イエスは暗闇の中をじっと立っておられたのです。暗闇の中でも漁に出た弟子たちを見つめ続け、思い続けておられたのです。

　今日の宣教・メッセージのタイトルには「見つめ続け、思い続ける」とつけました。イエスさまは夜の暗さの中でもいてくださったのです。
　岸は、陸と海・湖の間、重なる所、海は危険な場所とみなされ、陸は安全な場所と思われます。陸が人の生きる場所なら、海は死と隣合わせの場所、どこか死の危険をも思わせる場所です。つまり生と死の間に、復活された神の子イエスはしっかりと立っておられる。立ってくださったのです。
　そして苦戦して働く弟子たちを思い、見ていてくださるのです。それは今日においても言えることではないでしょうか。ここにキリスト者の慰めがあるのではないでしょうか。場所を超え、時を超え、時代を超えた慰めがあるように

思えます。主イエスは教会の働き、キリスト者の働き、そして人を助ける働きをする人々を見てくださっているのです。

今日は母の日です。
先日、新聞の投稿記事に心揺さぶられました。ご紹介したいと思います。
「孫の幸せ思い 便りをこらえた祖母」主婦　吉田みどりさん、大分県在住で７８歳の方の体験されたことの投稿です。読みます。
「1949（昭和 24 年)、姉 9 歳、私 8 歳、弟 3 歳を残し、母は 42 歳の若さで世を去った。母の実家のある東京から私たちの住む福岡に、1 カ月ほど来てくれていた祖母が帰る日、姉と私は祖母の両袖をつかみ、早朝の暗い道を泣きながらバス停まで歩いた。　それ以来、祖母と頻繁に手紙をやりとりし、祖母からは本や手作りの遊び道具も送られて来た。数年後、父が再婚し、新しい母との楽しい生活が始まった。その頃、祖母からの便りがピタリと途絶えた。
心配するも様子を知るすべがなく、十数年の年月が流れた。
その知らせは突然に来た。亡き母方の親族から「余命わずかのおばあちゃんが孫たちに会いたがっている。」と。すぐに上京。入院中の祖母に抱きつき、便りが途絶えた訳を尋ねた。祖母は「どんなに便りをしたかったか！けれどね、
一日でも早く新しいお母さんになじんでほしかった。」と泣いた。
自分より孫の幸せを願っての決断は、まさに孫たちとの生活の中にいる私への教えとなっている。」以上です。
ずっと別れた孫たちのことを思い続けておられたのです。
聖書に戻りますと、イエスさまは、弟子たちと十字架で死に別れ、弟子たちのことを、思い続け、じっと見続けて来られたのではないだろうかと思うのです。
聖書によれば、弟子たちが思っても見なかったような驚きの、すばらしい出来事が起こって行きました。神さまの憐みと慈しみの中、主イエスがリードして行ってくださったのです。弟子たちはイエスの声に従って良かったのです。
5:イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。
6:イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。それは大漁の出来事だったのです。
その時、「イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。

最初にイエスに気づいたのは直観力のすぐれた弟子のヨハネでした。ヨハネによる福音書はこのヨハネの名でまとめられています。その声を聞くと弟子の筆頭格のペトロは、「裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。」。
上着とは、足元まで包む作業着で、その作業着を腰あたりまで捲し上げてということではないかとの学者の説もあります。ともかく、実直で感情の激しいペトロは湖に飛び込んでイエスのいる岸へと泳いで向かったのです。そうせずにはおれなかったようです。

8:ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。

二百ペキスとは、だいたい９０Ｍほどと言われます。

9:さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。

イエスさまはあらかじめ、弟子たちのために朝の食事を用意してくださっていたのです。この場面に心動かされる方もおられるのではないでしょうか。
主は備えたもう、イエス備えたもう。神が備えてくださる、ということ。
神さまの心、働き、計画は、すぐにわたしたちには分からなくても、すべてを最善に導いてくださるのです。神さまと主イエスさまが教会と共に、わたしたちと共にいてくださるのです。

イエスは復活された姿を、三度も（「とことん」の意味あり）弟子たちに現されました。弟子たちは、深い慰めと力を得たと思います。
　昔も今も、状況は変わっても、主に仕える働きの中に、わたしたちの信仰と希望と愛の奉仕の働きの中に、主が共にいて必ず導いてくださるのです。
　それを信じて、思い煩いは何もかも神にお任せして歩みたいと願います。

　　主の平安を祈ります。